

IARU GSP 2010 報告書

法学部 4年

はじめに

私は2010年7月27日より8月13日まで、カリフォルニア大学バークレー校(UCB)のGSP ”Media, Culture and Society: The Middle East in the Global Context”に参加しました。授業はもちろんのこと、授業外の諸活動においても自分自身の成長につながる経験が多く、とても充実した3週間となりました。この体験を、今回は(1)授業、(2)生活、(3)その他気づいたこと という3点に分けて報告したいと思います。

授業について

クラスの構成員は大半がGSPの参加生が占め、10人弱ほどUCBの生徒が参加していました。ほとんど全員が中東世界かメディア(特にジャーナリズム)に興味を持つ生徒でした。また、知的好奇心が強い人たちが多いのが印象的でした。

授業はゲストレクチャーを中心とした座学と、2週目からはインターネットを使ったワークショップが平行して行われました。ゲストレクチャーはジャーナリストや中東での人権活動家、国連職員など、テーマに沿って様々な人がレクチャーをしてくださいました。

座学では、アメリカの特徴が形式・内容ともに現れていたと思います。まず形式についてですが、日本のような一方通行型の授業ではなく、生徒が自由に発言してよい双方向型の授業でした。良い点としては授業が活性化されることです。生徒の直接のフィードバックによって授業内容が深くなったり、本来の授業内容とは違った方向に広がったりするのを実際に目の当たりにしました。特にクラス全体で女性の人権問題について議論があった授業の後は、いつもの授業より濃い時間だったように感じました。

悪い点としては授業が停滞することです。全部の発言の質が良いわけではないので、中にはどうしても良い発言や、授業内容を何回も反復させるような質問が散見されました。また、授業の時間が足りなくなり多くの授業の結末が中途半端となってしまったことは否めません。

内容についてですが、担当講師のフランチェスカ先生から中東の近代史や現在の情勢を学ぶ一方、ゲストからはアメリカおよび中東世界のメディアや、彼らの経験・業績を踏まえた各々の中東の捉え方をレクチャーしていただきました。

印象に残っているのが講師の方々の中東についてのレクチャーです。フランチェスカ先生が「アメリカの国際関係論は『どうやればアメリカがうまく介入できるか』を前提にしたもの」とおっしゃっていたとおり、今回のプログラムもアメリカの価値観が主役

となるような内容が多かったように感じます。たとえば中東地域における肥満や糖尿病を治そうと活動していらっしゃる方からのレクチャーがありましたが、医学的に証明されていることとはいえ、肥満を賞賛する性格がある中東文化を無視した独善に走っているような印象も受けました。また、中東とアメリカとの交流の歴史を研究する方から研究内容について講義がありましたが、中には中東文化を無理やり押し曲げてアメリカ文化で説明するような内容もありました。

ちなみにフランチェスカ先生は、アメリカに対してヨーロッパは「その地域の文化を理解するために研究する」とおっしゃっていました。今まで漠然と海外留学を将来の選択肢の一つとして考えていた自分でしたが、国によって学問の性格が違うということを知り、その気持ちが少し具体的になったように感じます。今回は国際関係論における性格の違いなので、他の分野についてはどのような違いがあるのかは分かりませんが、学問対象へのアプローチ方法が勉強の中でとても重要な位置を占めると考えている自分としては、海外で学ぶ際には学問の性格を重要な基準にしたいと思いました。

ワークショップでは、グループワークと個人課題が平行して行われました。グループワークは5, 6人のグループを6組ほど作り、各グループが設定されたテーマについて研究し、グループでウェブサイトを作るというものでした。個人課題はグループワークの研究を補完するために各自で調査を進めていくものでした。

自分のグループは”Israeli – Palestinian negotiation”について、Mainstream TVを対象として調べるというテーマが設定されました。他のグループメンバーはオックスフォード大学、オーストラリア国立大学、シンガポール国立大学、ボローニャ大学からの生徒でした。

その後の話し合いによって、ガザ支援船襲撃事件について各国のMainstream TVの報道の仕方がどのように違うのか、どうして違うのかを調査することになりました。自分は日本のテレビメディアを担当することになりました。

日本のメディアがこの問題について全く関心を持っていないことを改めて認識することになりました。日本はこの問題と接点がなく、国民も関心をもっていないため仕方がないことではあります。しかし一方でアメリカ、ヨーロッパを巻き込んでいるこの問題が一地域を越えたものであることを考えると、これから日本人が世界に出て行くためには常識としてある程度の理解が必要なのではないかと強く感じました。

また、日本のメディアがあまりインターネットを通じたオンデマンドサービスに積極的でないことに気づきました。FOXなど他国メディアはインターネット上でのサービスを拡大し、新たなメディアとしての形を完成させようとする姿勢がありました。それに対して日本のメディアはインターネットをテレビ放送の付属サービスのように扱っている性格が強く、遅れをとっている印象を受けました。

グループワークでは各国のテレビの立場の違いがくっきりと見えたのが印象的でした。全体的にイスラエル軍を非難するような立場をとる国が多く、日本も（他国に比べてあまり扱われておらず、インターネット上にはわずかな情報しか残っていませんでしたが）報道内容は支援船寄りと言えました。メディアの世論に対する影響力を考えると、世界でのこのような報道内容の両極端化がパレスチナ問題の深刻化の原因の一つであり、これからも問題解決の障害になっていくのではないか、という結論が出ました。

個人課題では、日本のテレビメディアのほかに、韓国・中国のメディアがこの問題についてどのように扱っているかを調査しました。問題と直接関係していない3カ国の間でも、この問題に対する関心の程度に大きな違いがあることがわかりました。比較的無関心の日本、韓国に比べて、中国のテレビはこの問題を非常に多く取り扱っていました。国際政治でも中国政府は世界に先立ってイスラエルを非難しており、世界のイニシアティブを握ろうとする意識の高さがメディアに現れていました。

生活について

生活はキャンパス近くの寮が中心でした。3人部屋に滞在し、オックスフォードの学生と北京理工大学の生徒がルームメイトでした。お互いの国について話しあうなどして、楽しく過ごすことが出来ました。文化の違いによる生活上のトラブル等、気になったこともありませんでした。

食事は近くのカフェテリアでしたが、時間の融通がききにくい上に口に合わない料理が多かったです。バイキング方式でしたが、ほぼ毎日サラダ・ピザ・フライドポテトのみを食べていました。

バークレーは落ち着いた街で、学生が勉強に集中しやすい環境のようでした。

授業は朝9時40分から17時まででした。毎日50ページほどの読み物の課題に加え、時々グループワーク・個人課題も出されたため、授業後に遊びに行くなどの余裕はあまりありませんでした。

土日はGSP主催の遠足のほか、生徒同士で外に出かけることもありました。主な行き先はサンフランシスコでした。日本人参加者同士で郊外のアウトレットに行ったりもしました。日本人は買い物好きのようです。

その他気づいたこと

滞在中はいたるところで自分の英語能力のなさを痛感しました。特に自分が話す場面で強く感じました。授業中はもちろん、食事中などでも生徒同士で議論が始まることが多かったのですが、自分はその議論の内容についていっただけで精一杯で、アカデミックな議論の最中は発言がほとんど出来ませんでした。意見を聞かれたときも、言いたいこ

とをうまく言うことができず、とても悔しい思いをしたことがあるのを覚えています。一方で、非英語圏からの GSP 参加者は東大のほかに北京大学とコペンハーゲン大学の 4 人でしたが、彼女らはそのハンデを感じさせないほど授業にコミットしていました。英語力もさることながら、発言する積極性も自分の課題だと感じました。

また、日本で生活する以上、ドメスティックなことばかりに関心が向かいがちですが、もっと世界の出来事や話題にも関心を向けるべきだと感じました。たとえば今回扱ったイスラム教などの宗教は日本人にとってあまり関心のないものですが、世界では安全保障や経済にも結びつく問題であるとともに、個人では他文化圏の人と交流するときが一番意識しなくてはいけない事柄でもあります。どこからどこまでが「世界の常識」の範囲に入るのか、今回だけでは分かりませんでした。他の参加者の間には確実に共通の前提知識や関心事が存在しているような印象を受けました。

これらを今後の生活で克服しながら、次に海外へ行く機会に備えたいと考えています。

以上

IARU GSP 報告書

法学部第三類 4年

日本の若者の内向化が著しいと叫ばれて久しいが、日本の新卒就職活動文化や「入院」と揶揄される文系の大学院進学への忌避感、奨学金制度の不備など一朝一夕に改善できるわけではない社会的な諸問題を考えれば、後期教養学部や工学部などを除いて他に大学が公式に学部生を海外大学に送り出す制度をもたない（日本の最高高等教育機関とされている）東京大学の、この全学部生に開かれた唯一の短期交換留学制度である IARU GSP は、授業料分の経済的援助を含めて評価されて然るべきだと思われるし、また私自身も非常に感謝している。以下、私が参加したカリフォルニア大学バークレー校における"Media Culture and Society in the Middle East"のセッションについて述べる。

・セッション自体について

私自身一年間アラブ地域に留学していたこと、イスラームやいわゆる中東学について個人的な興味が強く、ある一定程度の知識と経験を有していたことや思想の偏向等が影響するのかどうか定かではないが、講義の内容、質、レベルとしては日本で言うカルチャーセンターないし教養番組のそれに留まり、仮に講義が私の母語である日本語で展開されていたならば、何人かの学生のように授業中ネットサーフィンに甘んじていたかも知れない。しかし、オックスフォードの **Ph.D candidate** であるメインの講師や、その他華々しい経歴を CV 上において持っているその他のゲスト講師の実際を含めて、アメリカ（ないし英語圏）の大学学部教育やアメリカの中東学のあり方の一端を垣間見ることができたことが、当初からの目的でもあったが何よりの収穫で、「聞いて理解して考え自分の意見を持つ」という段階まではおそらく相対的にも満足に達成できたことが今後の自分の将来に積極的な意味を持つことは間違いない。ただ、ネイティブ英語話者であるクラスメートらとのグループワークでは、議論の内容はほぼ理解できても、英語圏在住経験がなく、英語のスピーキング能力の向上に尽力してきたわけでもない私にとって、自分の持つ意見をそのまま伝えることは非常に困難であったし、そもそも（おそらく日本語文化と英語文化における）問いの立て方や思考回路の相違によっても、それに対して不慣れであると自身の思考力がかなり規定されることにフラストレーションを感じたが、これもある程度の慣れと努力があればそれなりに向上されるだろうという見通しが立ったことは非常に有意義だった。

・セッション外について

多様なバックグラウンドを持ち、必ずしもネイティブ英語話者ではない大量の学生に対しての支援体勢はさすがアメリカと言うべきであった。バークレーの学生含め、IARU から派遣された学生を中心に交流を深められたことが何にもまして貴重であったと言える。

IARU GSP 報告書

(カリフォルニア大学バークレー校)

経済学部経済学科 3年

今回の GSP での、私の人生初の海外での授業と約一か月間の生活を経ていかに自分が「日本人」であるか、そして如何に我々が世界へと目を向ける必要があるかについて身を以て体感することができました。

授業では、積極的に発言し、自己のプレゼンスをアピールすることが良しとされること、話さない＝考えていないと思われることなど、かなりのカルチャーショックを受けました。しかし、日本で1対大人数のテレビを見ているかのような授業とは全く違った双方向的な授業は刺激的であり、授業内容も知的好奇心をそそられるような興味深いものでした。また授業にはグループワークも含まれており、世界各国出身の人と議論し、一つのプレゼンテーションを作り上げてゆくのは苦勞もありましたがよい経験となりました。

その中で、自分は今まで自分で思っていた以上に「日本人」であることに気が付きました。具体的には、よほどのことがない限り発言はあまりしない、トラブルは避け、曖昧なままであっても突き詰らない、といった姿勢を無意識のうちに行っていることです。これらは今までの日本では一度も気づきませんでした。他者とのかかわりの中でこそ自己を知る、とはまさにこのことだと思いました。

授業以外の生活でも、日本では得られないような経験をたくさんすることができました。GSP で世界中から来た様々なバックグラウンドを持つ方々と夜遅くまでカフェでいろいろなトピックについて語り合ったり、フランクな現地の人々のホームパーティーに参加させていただいたり、と、旅行や語学留学プログラムでは到底味わえないことを体験できました。

そして、授業、課外両方を通して感じたことは、日本という国の特異性です。日本以外のどこの国から来た人にとっても日本は特殊な文化を持ったエキゾチックで閉鎖的な島国であるようです。かつて、日本が経済大国であった時代はそれでも問題はなかったかもしれません。他国の人々が日本にアジャストしてくれる時代もあったのかもしれませんが。しかし、現在、経済が縮小し、中国を筆頭とする新興国が台頭する中でそのような国に興味を抱いてくれる人がいるのでしょうか。答えはノーです。我々は世界で生き残るためにより世界に目を向け、世界基準を受け入れる必要があると感じました。

今回の GSP を通じ、日本に対する危機意識、そして日本のために働きたい、という意識が芽生えました。私は間もなく就職活動を始めますが、その思いを軸にしていきたいと思っています。そして、機会があればぜひもう一度 GSP 参加させていただきたいと思っています。